5 アメリカ仏教が私たちに投げかけること

第23回法華経・日蓮聖人・日蓮教団論研究セミナーは、平成23年１月、「ANOTHER仏教――アメリカ仏教を通じて日本仏教の明日を考える」をテーマとして開催された。

海外への布教は、檀家制度というようなもののないゼロからの出発です。その歩みは、もちろん、順風満帆というわけには行きませんけれども、本宗に限らず、仏教全体としてみれば、徐々に成果を上げつつあるのも事実といえましょう。

海外、特にアメリカの仏教、仏教教団について学び、檀家制度のない場所での仏教教団の在り様を研修することを通じて、未来の日本仏教、特にこれまで檀家制度に依存して来た伝統仏教教団の在り方について考えることを意図して、このセミナーは企画されました。（『「アメリカ仏教」を考える』「あとがき」 日蓮宗新聞社　平成27年）

国際開教布教センター（当時）カリフォルニア州・ヘイワード市（2010年11月撮影）

キリスト教徒である一アメリカ人が、どういう経過をたどって日蓮宗とめぐりあったのか、マコーミック・龍英師はセミナー講演で語る。龍英師は、最初、禅仏教と出会うことによってキリスト教への疑問をいだく

カトリックであろうとプロテスタントであろうと、キリスト教そのものが二つの点で重大な間違いがあると確信しました。(1)「ジーザス・クライストによってのみ人は救われる。」(略)(2)「人生は一度きりで、死後は永遠に天国で暮らせるか、地獄へ落とされるかのどちらかである。」私の考えでは、どんな宗教に入っていても、誠実で善良な人であれば、「救い」の意味はそれぞれ違っていても救われると思うのです。

禅仏教に夢中になっていた1980年代のフィラデルフィア郊外、高校生だった龍英師は、路上で日蓮正宗創価学会の集会に誘われた。

集会はとても奇妙な体験でした。小さなアパートの部屋に20～30名の男女が集まり、人種も経歴も様々で、まさに北米社会の縮図の様相でした。(略)彼らは素足で仏壇の前に座り、日本漢字音で方便品と寿量品全部をとても早口に唱え、お題目も始まりました。皆で一緒に仏道修行をしていることに幸せそうで、ディスカッションも熱がこもっていました。そして日蓮仏教によっていかに自分の人生が好転していったか、その体験を語り合っていたのでした。

「アメリカ仏教」を考える
(日蓮宗現代宗教研究所／平成27年3月31日発行)

龍英師は、創価学会によって禅仏教以外の仏教があることを知ったのだった。

最も重要なのは、一念三千と十界互具の教えは、私の人生を理解する手段となり、希望を与えてくれました。更にどういう人生を送るかは自分自身に責任があるのだということを悟らせてくれたのです。(略)

天国も地獄も己の中に在ることを知りました。死後に天国に再生することを求めるよりも遥かに崇高な目標があることを知りました。

しかし、龍英師は創価学会を去る。

日蓮聖人と法華経の教えが本当の仏教であると確信したのです。しかし、日蓮正宗と創価学会の教えが果たして法華経や御書の教えと合致しているか自信が持てませんでした。創価学会員の傲慢な態度や、その他の教理や宗教に対する拒絶的かつ敵意に満ちた態度に私はうんざりしてしまいました。こういう不寛容で偏狭的な態度こそ、私がキリスト教において我慢ならなかったところなのに・・・。

西海岸に移った龍英師は日蓮宗と出会う。日蓮宗僧侶となり、次のように述べている。

仏教に興味を持つ人が惹かれるものの中で、日蓮宗に欠けている教えなどまったくないのです。そして他宗派にはないものが我々にはあります。お題目や法華経を唱える行が多くの人にいかに魅力的か、もう少し高い評価をしてもいいのではと思うのです。日本山妙法寺の人々と行進した時も、お題目の音の響きが素晴らしいと言ってくれた人がいました。もちろん、お題目の意味や目的などは分からなかったでしょうが。

アメリカや韓国の創価学会を経て日蓮宗と出会った人びとが、私たちとは違った視点から日蓮聖人と法華経の教えを語る時代である。値(あ)いがたき教えにめぐりあった彼らのよろこびは、私たちには新鮮である。そのうえで大切なことは、なぜ、彼らが仏教、そして日蓮宗を求めたか。その原因となった苦悩や疑問を共有し共感することではなかろうか。

私たちの唱えるお題目

日蓮聖人が『観心本尊抄』に「釈尊の因行果徳の二法は妙法蓮華経の五字に具足す」と、説かれたように、お題目には、久遠の釈尊が成仏するために菩薩として修行を積んだ功徳「本因妙」(因行)と、仏となって衆生を教化・救済してきた功徳「本果妙」(果徳)が備わっています。

我々日蓮宗の信仰は、所依の経典である法華経に説かれる久遠の釈尊を本尊とし、その功徳「因行果徳」を妙法五字に収めた題目を唱えることを行としますが、創価学会の信仰は、これとは全く異なるものです。彼らの教義は、もともと日蓮正宗の信徒団体であったことから、その教義である「大石寺教学」に基づくものです。

法華経・久遠の釈尊は、正法・像法の釈尊滅後二千年の間で衆生を教え導く役を終え(脱益)、末法今日は、久遠の釈尊より更に過去(久遠元初)に成仏した「久遠元初自受用報身」という仏が日蓮聖人として顕れ、題目を衆生に弘める(下種益)とします。この様な教義を「日蓮本仏論」といいます。また、久遠元初以前より菩薩が修行して「久遠元初自受用報身」になるまでを功徳とした「本因妙の題目」を説きます。

以上のように、創価学会の教義である大石寺教学は、法華経・久遠の釈尊とは何の関係もない仏「久遠元初自受用報身」や「本因妙の題目」を説く故に、アメリカSGIにおいて龍英師が、「日蓮正宗と創価学会の教えが果たして法華経や御書の教えと合致しているか自信が持てない」理由となったとも考えられます。キリスト教文化圏では、聖書に向き合った信仰を生活の基礎に持つことから、仏教信仰においても聖典である法華経・宗祖御遺文とかけ離れた教義を持つSGIに疑問を持ち脱会する人々がいるのではないでしょうか。

平成26年末、創価学会は会則の本尊「一閻浮提総与・三大秘法の大御本尊」(大石寺板曼荼羅本尊)を改定して、日蓮聖人の御図顕された全ての曼荼羅本尊を等しく「本門の本尊」として認める等、近年、大石寺教学から離脱する傾向が見られます。